

3 学期始業式の校長メッセージ

明けましておめでとうございます。

緊急事態宣言が発令され、落ち着かない中での始業式となりました。

冬休みは、クリスマスに続き年末年始の心浮き立つ行事が目白押しの華やかな時季ですが、今回は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に歯止めがかからない中、ステイホーム中心の自粛の日々になりました。皆さんも、御家族の皆様とホスピタリティ溢れるお正月を過ごされたことと思います。

12月の下旬、クリスマスが過ぎると、お花屋さんの店先からシクラメン・ポインセチアが姿を消し、注連縄・門松・輪飾り等のお正月を彩る品々が所狭しと並べられ、街は年越しムード一色になります。でも、実は、カトリック教会の暦では年明けもクリスマス以来の「降誕節」が続き、今年は、元日に「神の母聖マリア」を、3日に「主の公現（キリストの降誕によって神が私たち人類と共におられることが明らかにされたこと）」を、10日に「イエスの洗礼」を祝って降誕節は結びを迎えるのです。年をまたいで、キリストの誕生を祝う降誕節が続くことから、分断せずに流れる神様から与えられた時を実感できます。

遙かな時の流れを表現した日本の短詩型文学に、「去年今年（こぞことし）貫く棒の如きもの」という人口に膾炙(かいしゃ)した高浜虚子の句があります。新年の季語「去年今年」を有するこの句は、日本で初めてノーベル文学賞を受賞した文豪 川端康成に「禅の一喝に遭った」と言わしめた名句です。短詩型文学は、作者の無量の想いが凝縮されており、読者は想像の翼を広げて多様な解釈の可能性を楽しむことができますので、「これ!」という読解の定説に縛られないほうが面白いですが、虚子の「去年今年～」の句の眼目は、暦の上で大晦日と元日を分けて時を刻んで新しい年を迎えることは、人間が定めた、あくまでも人事であり、年末や年始とは無関係に時は連綿と悠久に流れ続けるという哲学的な命題にあるのではないかと愚考します。人間が成す人事・人為に比べて、自然、更に言えば神の摂理はなんと深遠なのかとの思いが一人（ひとしお）です。

時間に関して、近代以降、人間は科学技術を駆使し、例えば、電子レンジや冷蔵庫等の電化製品の開発により一瞬での解凍や長期保存が可能になり、また新幹線やジェット機の発明によって空間的にも時間が短縮される等、時は人間の手中に収まり、コントロール出来たかに見えました。しかし、日進月歩

の技術革新によっても、人間の健康寿命を完全に伸ばして延命することは至難の業で、手中に入れたかに思えた時間の制御も有限のいのちの前には無力でした。また、自然の猛威に対しても洪水等の災害を防いだり、疫病の蔓延を食い止めたりして、近代文明社会を発展させ、人生を謳歌してきました。しかしながら、昨今の大地震や温暖化による豪雨・台風による被害は想像を絶し、昨年来の新型コロナウイルス感染症のパンデミックでは今も不測の事態が続き、近代文明だけに頼る社会の限界が現出しています。

近代文明の考え方は、観察的・分析的で、一方、世の中の現象は、顕在化した部分だけで対処することは難しく、潜在的なものにも目配りしたうえでの総合的・統合的判断が不可欠です。例えば、病気の原因が検査で分かったとしても、それを治療する方法が確立していなかったり、身体の状態との兼ね合いで手段を講じられなかったりすることもあります。中国・唐代の『寒山詩』に収められた、「無源の水を尋究すれば、源窮（きわ）まりて水窮まらず」（現代語訳：湧き続けている水の水源を探り、水源に辿り着いてみると水は相変わらず滾々（こんこん）と湧き続けている）つまり、原因は究明されたけれど、現象そのものは変わらない、という意味の詩句を髣髴（ほうふつ）とさせる事態です。

今回の新型コロナウイルス感染症パンデミックにより、私たちは近代文明の恩恵に浴した生活に感謝するとともに、近代文明だけに依拠していのちを永らえていると捉えるのは錯覚であることに気付かされました。人間は、宇宙というマクロコスモスの鼓動に連動しながら生かされているミクロコスモスとしての身体を養い、更に宇宙船地球号の乗組員として「ともに暮らす家」である地球を守り、次世代に繋いでゆく責任を担っているのです。今、大切なのは、人間が何億年も前からいのちを受け継ぎ、生態系の中で他の多様な生き物と共生しているという視点ではないでしょうか。ウイルスが生き物であるか否かの議論はひとまず措くことにして、人間の歴史より古くから存在しているウイルスに人類が「勝つ」ことは非常に難しく、その都度「超克」つまり乗り越えることを繰り返してきた経緯を思い起こす必要を実感します。今回の新型コロナウイルス感染症パンデミックも、異常気象をはじめ、人間と動物との過剰な接触やグローバル化の進展等の地球・社会環境の変化が背景にあることは疑う余地がありません。

感染者数が急増し、決定打となる解決策を展開できない状況下で、私たちにできることは「祈り」です。心に抱いた想いや念を言葉にして神様に託しましょう。「想い」という漢字を分解すると「相手（対

象) +心]、「念」は「今+心」でそれぞれ「相手をおもいう心」と「今の心」と読み解けます。相手を慮る心を、今この瞬間に届けることが祈りによって可能になるのです。

教皇フランシスコは、『パンデミック後の選択』（2020.7 カトリック中央協議会刊）の中で、「国際社会として、環境破壊を食い止めるに必要な措置を講じますか。それとも数々の兆候を無視し続けますか。無関心のグローバル化は、わたしたちをその歩みにおいて危険にさらし挑発し続けます。どうかわたしたちが、正義と愛と連帯という必須の抗体を見いだせますように。愛の文明という、今とは違う生き方を恐れないうでください。（「再起計画」P.57 所収）」と述べ、希望の文明をこつこつ築く努力をすることの必要性を説いていらっしゃいます。無関心のグローバル化から脱却し、眼前の様々な問題に我がこととして関わる姿勢を持ちたいものです。海外との行き来が制限された現況でも通用する真のグローバルな生き方とは、自らの領域・分野に留まることなく、自分と異なる価値観・世界観に視野を広げ、他者を寛容に受け容れる姿勢を身につけることです。

人は一人では微力ですが、共同体として思いを一つに祈ることで、祈りは塊になって強力なパワーを発揮します。日本古来の「無常」は、永続性と対極にある感性ですが、悪いことも「常ならず」と考えれば、現在の暗澹たる状況も長くは続かない！と「今・ここ」に希望を持てるのではないのでしょうか。

私たち一人一人が、今できることを全うすることが肝要です。体調がしんどい時は休息して癒す。学べる環境にある時には、その機会に恵まれたことに感謝して目の前の課題は勿論、自らのテーマを見出して探究を続けダイヤモンドのカラット数をアップさせる。そして、習得したことを発展させて自己実現のプロセスにおいて社会に還元し、人のために生きることを喜びとする人生の歩み続ける。今できることの集積が「光と塩」の大目標へと直結するのです。皆さんの今できることの具体的な課題は、何でしょうか。御家族にホスピタリティ溢れる態度で接する、英語の構文をたくさん覚える、「すべてのいのちを守る」ことに徹する……、一年の計は元旦にあり！と言いますが、学校の元旦にあたる始業式の今日、今年の抱負を心にしっかり描いてみてください。

3学期は、各学年の1年間の学びの総括の秋（とき）です。高3の皆さんにとっては、来週末の大学入学共通テストを皮切りに、愈々大学入試が本格的に始まります。新入試元年、新傾向の問題を予想しつつ準備に励み、「解ける！できる！受かる！」のポジティブシンキングで栄冠を勝ち取り、夢の実現を果たされますように！学校では、全教職員が高3の皆さんの応援団です。遠慮なく声を掛けてください。

中3の皆さんも高校での学びという新たなステップに向かって全力投球の日々を！高3・中3の皆さんの実力発揮をたくさんお祈りしています。

高2・高1・中2・中1の皆さんも、現在の学年で学ぶべき知識・方法論をガッツリ身につけ、自ら運用できるように発展的学習に努めてください。これからの時代、蓄積した知識をクリエイティブに活用する探究の力が必須です。21世紀を渡っていくために必要な力をイメージしつつ、毎時間の授業に真剣に取り組まれますように！

1月下旬には、新聞部主催の校内弁論大会が開催されます。今年は、コロナ禍の中、例年と異なる新スタイルによる発表形式の予定ですが、冬休みに中1～高2の皆さんが執筆された玉稿の発表を心待ちにしています。

緊急事態宣言が発令され、閉塞感の拭えない日々ですが、3学期もワクワク学んで勝負脳を活性化させ、「すべてのいのちを守る」を第一義に健康管理に気を付け、所期の目標に向かって邁進してください。もし、困ったり悩んだりしたら、迷わず祈ることをお勧めします。

「思い煩いは、なにもかも神にお任せしなさい。神があなたがたのことを心にかけてくださるからです」
(ペトロの手紙I第5章7節)

そして、聖人の御取り次ぎにも信頼してください。例えば、疫病退散には聖ベネディクト、探し物には聖アントニオ、平和にはアシジの聖フランシスコ等、心強い御助けがあります。因みに、今年度、皆さんにお渡ししているお誕生日カードには、生まれ月にゆかりのある聖人が記されています。聖人の可愛いイラストは事務室の方に御協力を戴きました。

今年も、皆さんと御家族の皆様の上に神様の豊かな御恵みと御加護がありますようお祈りしています。

3学期の日々、勿論今日も一日、ファイト！です。

喝！！